



特別企画①

土幌小屋 チセ・フレップ ～自治精神の申し子、不惑へ～

鹿田 幸年（S50年入寮）・山本 牧（S49年入寮）（共著）

1. 緒言

昭和50年以降の入寮者でなくても、恵迪寮、あるいは北大の関係者でしたら、「土幌小屋 チセ・フレップ」という名を耳にされたことがあるかもしれません。

「土幌小屋 チセ・フレップ」は、昭和50年秋の恵迪寮祭の記念講演会がきっかけで、道東土幌町の大雪山国立公園脇の高原に、寮生たちが町や農協やOBや教官の援助を仰ぎながら、数々の苦難を乗り越えて二年半がかりで建てた研修施設です。「チセ・フレップ」とはアイヌ語で「赤い小屋」。実は文法的に正しく

はないのですが、響きがいいので、当時の設立委員による投票の結果、起工式の直前に決まりました。委員長の大堀尚己君の発案でした。

ところで、恵迪寮という名の特異な有機生命体が生み出し続けている有形無形の産物には、社会的に見てもユニークかつ貴重と思われるものが数々存在します。寮歌、寮史、部屋サークル、各種行事などなど。

それぞれの来歴や内容もさることながら、いずれもが時代を映しながら現在も更新・進化し続けているという点で、類い稀な存在と言えるかもしれません。

それらの中でも「チセ・フレップ」は、一般寮生たちが、寮や大学や札幌という所与の枠を超えて、十勝の土幌町という自治体と稀有な縁に始まる信頼関係を育み、数々の障壁を乗り越えて建てた施設です。しかもそれを代々の委員会がバトンのように受け渡しながら現在まで活かし続けてきたという、多くの人の思いと汗の、冷や汗も含めて、もしかしたら、前例の無い稀有な結晶と言えるかもしれません。

今、設立から40年を迎えようとする「土幌小屋 チセ・フレップ」とは一体何だったのか、時の篩にかけられた今、その存在の本質と意味が少しなりとも見えてく

ると思うのです。初期の関係者も還暦前後の齢を迎え、大袈裟に言えば、個人としても人生の前半戦の総括の一つとして考えてみたいのです。

寮歌のお好きな方でしたら昭和53年の記念祭歌にその事跡が詠み込まれていることをご存じでしょう。

「気高き野心の男の児等が土幌に山小屋（こや）をうち建てぬ 十勝の山と平原（の）に抱かれ果てなく魂（こころ）翔けるなり 厳しき北の大地より新たな夢に飛びたたん」

（昭和53年 第70回記念祭歌 「草は萌え出で」 三番 朝倉仁樹君作歌 田坂幸平君作曲）

「気高き野心」と聞いて、明治45年の名歌「都ぞ弥生」の五番「貴き野心の訓へ培ひ」のフレーズを想起される方も多いのではないのでしょうか。作詞者の横山芳介氏の後年の述懐によれば、「自分はあの歌の中に唯々北海の自然の真実な姿

を詠み込めようと努力した。二番・三番は比較的満足に書けたけれども、五番の『貴き野心の訓へ培ひ』の一句は未だに之以上の句が浮かばない。』（「恵迪寮史」と、その天啓の妙ともいえるべき表現を振り返っています。

この「野心」とは、もちろんあのクラーク博士の言葉「Boys, be ambitious!」を指していることに異論はないでしょうが、では、なぜ「土幌小屋 チセ・フレック」に「貴き野心」「気高き野心」のイメージが重なるのでしょうか。

なぜ理屈つばくこだわるのかと言いますと、意外に思われるかもしれませんが、実は小屋設立のために作られた趣意書の設立理念の中には「野心」も「大志」も、文言としては使われていないからです。

【設立趣意】

「現在、都市と大学の巨大化の中で学生の無気力化や学問の空洞化が進みつつありますが、私たちはこのような学生生

活をもう一度見直して、視座を十勝という北海道本来の風土を持つ地に移し、札幌農学校以来の伝統である地に足のついた生き方と学問のあり方を模索する場を主体的に創造してゆこうと思います。そしてこの施設が広く有効に使われることによって、土幌、十勝、ひいては北海道全体の糧になることを切望するものです。」

（昭和52年2月「第1次趣意書」より設立理念の部分を抜粋）



左から鹿田、山本（慎）、芹沢、布野、内田

この中の「札幌農学校以来の伝統である地に足のついた生き方と学問のあり方」という部分が核心です。この表現は、どこから来たのでしょうか。「地に足のついた」という表現は、むしろ一般的には「野心」と対立する概念ですから、矛盾しているように見えます。

実は、土幌小屋設立に関わった寮生の多くは、当時、復刻発刊なったばかりの「恵迪寮史」を読んでいた。文化活動を志す有志の集まりを「開識社」と名付け、その活動の一つとして、朝5時から「早起き寮史輪読会」を寮内で催し、クラーク博士の事蹟や札幌農学校、そして寮の自治の歴史を繙いていたのです。

「今朝、第4回目の早起き寮史輪読会を開いた。出席者は七名。実に最高記録である。33ページ目まで読み進む。(註:記された出席者名を見ると、出席者の大半はその後、土幌小屋設立委員となる者と寮史編纂委員である)。(一寮生の日記より 昭和51年六月15日)

ちなみに、寮史の33ページとは、内村鑑三氏をはじめ二期生の多くが当初猛反発しながらも徐々に基督教を受け入れて受洗するという印象的な場面なのですが、それまでに三回かかったということは、それまでいかに密度の濃い読み方と熱い議論があつたかということの証拠と言えるかもしれません。

余談ですが、その日記の同じ日の記載に、「先日、土幌の結城先生から待望の便りが来た。土幌恵迪寮(註:当初はこのような呼称も使われていました)を建てる土地が見つかったのだ。今までもやもやとしていた開識社だが、今急に視界が開けてきたことを実感する。」とあります。様々な活動が同時進行していたのです。

さて、草創期の札幌農学校でクラーク博士とその若き同僚が日々重きを置いて学生に教えていたのは、実習や実験や実地踏査など、生活世界から乖離していな

い「科学」としての「農学」であり、換言すれば「地に足のついた」学問のあり方に他なりませんでした。それと表裏一体をなす校風も、「紳士たれ」の言葉に象徴される、師弟の信頼関係を基にした自律的な生き方を志向した生活態度であろうと思います。

つまり、クラーク博士の中では「貴き野心」と「地に足のついた」生き方は矛盾するものではなく、むしろ表裏一体のものだったと思うのです。有り体に言えば、「Lofly Ambition with Sense of Reality」だったと思うのです。

もうお判りかと思いますが、小屋の設立趣意書の「地に足のついた生き方と学問のあり方」というフレーズは、気まぐれな思いつきからではありませんでした。

パラダイムシフトなどと表現すると大袈裟すぎるかもしれませんが、当時開識社に集った寮生たちにとっては、人口に

膾炙した「大志」や「野心」という概念よりも、自分たちが将来にわたって価値を置く理念を表す概念として「地に足のついた」という表現の方がむしろリアリティがあつたのです。

ともあれ、寮生という立場を考えると、寮生自身が研修施設を建てること自体、分不相応で破天荒なこと、というイメージを持たれるのも、もつともなことかと思えます。たしかに全国の数ある大学の寮の中で、同様な施設を建てた例は寡聞にして知りません。(山岳部や山スキー部、漕艇部などのサークルの施設は珍しくないでしょうが)。それどころか、全国を見渡しても、「学生たちが自治体と協力して建て、その後も共同運営している研修施設」など、どこにもないと思えます。しかもそれが40年近く続いている例は。

もちろん当時この小屋を作ることになった寮生たちにとつても、まさか現実のものになるとは思えない夢のような話

でした。しかし、思いつきや気まぐれや、いわゆる「棚ぼた」のようなものだったのかと問われると、それらとは根本的に違うように思います。

と言いますのも、今振り返ると、恵迪寮という有機生命体の種子が十勝の土幌町という土壤で発芽するためには、その前提としてさまざまな媒介や背景の存在が不可欠だったと思うからです。大きく言えば、当時の日本の時代状況や北海道、十勝という地域性、そして少々面映ゆい言い方ですが、寮生たちにわずかなりとも根付いていた自治の精神、寮の状況をなんとか変えなければ、という意識、そして、この人がいなければ建たなかったに違いないという決定的な人的要素に、ほかでもない必然性を感じるからです。

ご存じの通り、「内地」にないものを求めて渡ってきた本州出身の学生にとつて、今も昔も北海道は特別な意味を持っています。歴代の寮歌の歌詞を繙くまでもなく、大自然に包まれた大地に、フリー

ハンドで描く人生の序章。(ただ多くの場合、家出同様の後ろめたさと、ほとんど根拠のない将来への期待感を伴うのですが。)



土幌高原(東大雪)の山々

ところが札幌で待っていたのは、あまりに巨大で都会的な街と大量生産的な講義。そして優等生的な道産子たち。(勝手に抱いていた牧歌的な札幌のイメージは時計台界限や地下街を見て打ち砕か

れ、ヒグマのような男たちが跋扈しているはずの大学構内には、キャンパスライフを楽しむオシャレな学生たちが闊歩していた。」

そんなとき、少しばかり手荒に迎えてくれ、原点を再確認させてくれたのが、ほかでもない恵迪寮でした。

「常識を捨てよ！」

「今までの自分を壊せ！」

「仲間とはなにか、自由とは何か、学問とは何か、自分の頭で考えろ！」と。ストームはその象徴のように見えました。入寮詮衡にはじまり、寮務、炊務、監懲や文常などの委員会や代議員会、果てはアルバイトの幹旋から電話当番に至るまで、「自由を享受する代わり、自分たちのことは自分たちで決め、責任を持って遂行する」という自治の精神は、この間まで高校生だった新入寮生にはまことに新鮮なものとして目に映りました。

今でも忘れられませんが、入寮して間もない頃、皆が寝静まった未明に廊下の

非常ベルがけたたましく鳴り響きました。すると、寮内放送が入るやいなや寮中の寮生たちが血相を変えてバケツや消火器をかかえて出火箇所に走ってきたのです。結局誤報だったのですが、その時の息急ぎ切った並み居る面々の頼もしきは、なにか感動的でした。今思えば、前年に北寮火災があったからかもしれません。

ただ日常はと言えば、大学紛争の余燼が未だくすぶり、講義から帰ってくる自主品牌の上には各派からのオルグやアピールのピラがうず高く堆積しており、代議員会に出席するとセクト間の野次と怒号と紫煙の中で朝を迎える有様、借り物の言葉の不毛な応酬に、一般寮生は白けるばかりでした。

そのような中で、いわゆる政治闘争に身を投ずるのではなく、かといって受動的な学生生活の中で自閉的な世界に浸るのでもなく、それまで日常の中で停滞していた寮内の文化的な活動を広汎に復活

させようとした寮生たちがいました。もちろんそれは急に起こったことではありません。それに先立ち、意識の高い数名の寮生の呼びかけによって設立された寮史編纂委員会による旧寮史の復刻刊行（昭和50年11月）やそれに続く新寮史編纂への機運などの延長線上にあったのです。

そもそも「自治」と「文化」とは表裏一体のものではないか。それが両輪のように進むのが自然なことではないか。ヴェネツィアやポロニーヤなどの自治都市の歴史を繙くまでもなく、中世の日本でも堺や博多などの都市をはじめとして、「町衆」の魂である「自治」の精神は、深いところでアイデンティティやプライドと直結して芸術や学問を支えていました。（その象徴としての頂点が「祭」であり、ひとたび為政者と対立する関係になったとき、「自治」を行う者たちは非常に目障りな存在となるわけです）

そのようなことまで明確に意識してい

たわけではありませんが、少なくとも自治意識と危機感を濃く持った寮生たちが、札幌農学校のクラーク博士由来の伝統行事である「開識社」（寮生自身による演説会）の名を借りて集い、活動を始めたのでした。昭和50年の初夏のことだったと思います。

参加していた寮生の所属する部屋は、朝5時に起きる会、恵迪編集、寮史編纂、新聞会、恵迪座、遊子庵などで、人数は10名そこそこ。具体的な活動は、中庭の清掃に始まり、廊下の修理、寮史の輪読会、自主講座、講演会の開催、映画上演など、多岐に渡りました。寮祭では芝居「金色夜叉」の上演も敢行しました。

2. 発端

きつかけは、昭和50年の初夏のある日、寮務事務室で見かけた新聞の囲み記事でした。筆者は土幌町立幼稚園長の結城清吾氏（元早稲田大学文学部助教授・経済地理学）。町に住み始めた所感を教える

と思われる人物に宛てて書いた書簡体の文章でした。題名は「二つの人間環境」。

「W君、お手紙ありがとうございます。私も土幌へ移って約二ヶ月余たちました。この二ヶ月間は、全く未知の世界に飛びこんだため、いろいろなことで戸惑ったのは事実です。（中略）

先日所用があつて久しぶりに東京へ行つてきました。東京と土幌との生活の大きな差異を感じるとともに、土幌へ移り住んだことの喜びを噛みしめています。（中略）

現在、私はカッコウの鳴声で目をさまします。外へ出ると、大きく生長した柏の葉をとおして、朝の陽光が輝いています。朝食をとり、歩いて二、三分の距離にある勤め場所へ行くのです。（中略）

今、私は、静かに私の人間改造がおこなわれていることを感じます。大都市での生活をふりかえってみると、神経をさ

かなでする、イライラする現象ばかりが多いのです。公害はもとより、混雑する乗物や雑踏、自動車の危険から身を守るために前後左右を見ながら歩かねばならぬ道路など、大都市の生活は、つねに緊張が要求されます。イライラ人間が多くいるわけです。それがどうでしょう。私の現在の生活には、イライラ、神経を咎める事象がすくないのです。当然、常に神経を使い、ちよつとしたことで怒っていた自分を省みて、私自身の人間改造がおこなわれつつあることを自覚させられています。（中略）

現代は、まさに「文明的転換」の時期であり、第二のルネッサンスが必要な時でもあります。第一のルネッサンスが神や自然から人間の独立、解放が求められたように、第二のルネッサンスは、資本や機械から人間の独立・解放が求められなければなりません。ある意味では、現代は意識的に退歩を図ることこそ進歩ともいうべき時代です。（昭和50年六月29日の新聞紙面より）

氏は「愛と緑の町づくり」をスローガンとした町づくりのブレインとして飯島房芳町長に招かれて在町しているとのこと。記事から伝わってくる問題意識と町づくりにかける情熱は、きつと寮生たちを刺激してくれると考え、秋の寮祭の記念講演会の学外講師の候補としたのです。（註：ちなみに第一候補は、「ワインによる町づくり」で全国に名を馳せていた十勝の池田町の丸谷金保町長でしたが、あいにく外遊中でした。もし実現していたら、果たして「池田小屋」は建っていたのか、興味の尽きないところです。また、あとで知ったのですが、結城先生はあの田中角栄が掲げた「日本列島改造論」に異を唱えた論客の一人だったとのことです）

九月の末、土幌町を訪れた学生三人を結城先生は幼稚園で歓待してください、馬鈴薯の茹で上がる湯気と園児たちの黄色い歓声の中で講師依頼を快諾してくれたのでした。

10月20日、はるばる寮祭を訪れた結城先生は、夜の大食堂で、「21世紀の日本と北海道」と題して、A・J・トインビーの「渡海文明論」を軸に、世界の北方文化に通じる北海道の風土と精神性の重要性や来世に担うことのできる役割を説き、東京中心の価値観から脱して視座を転じた「狩勝峠の向こうにこそ本来の北海道がある」と熱弁したのでした。

「恵迪寮史 第二巻」では、この講演について『非常によい内容のものであったが、時間が来ても少人数しか集まらなかったのには腹が立った。』と郎々録にある。』と記しています。（註：「郎々録」は19号室の部屋日誌です。ちなみに学内からは物理学の堀淳一教授「地図から見た北海道」、医学部公衆衛生の渡辺助教「白蟻病と六価クロム公害について」の二講演でした）

出席した寮生たちはこの講演にいたく共感し、講演後、札幌会館で先生と味噌

ラーメンを啜りながら互いの熱い思いを語り合ったのでした。そして、ぜひ十勝に来たまえ、ということになりました。

翌年3月1日から四泊五日の日程で、寮生など8名の学生は見渡す限り真っ白な雪原と地平線の土幌町の農家に分宿し、酪農などの体験実習をしたあと、東大雪の連山の麓、新田牧場近くの農業技術研修所で、農業青年たちや寮OBで帯畜大の田島重雄先生や帯広市元助役の木呂子敏彦氏らと「土幌自由大学」と銘打ったシンポジウムに参加しました。（註：「自由大学」とは、大正中期から昭和初期にかけて長野県の上田を中心に広がった農村文化運動で、それにあやかっつて命名したと結城氏自身が後に述懐しています）

そこで学生たちは離農や過疎の実態を聞き、町づくりをめぐる現実的な問題、そして北海道独自の文化とその課題についての議論に参加して、いわゆる常識や既知の報道とは異なる現実や知見に驚かされたのです。



士幌駅に降り立った自由大学に参加した学生たち

曰く、
「経済問題で離農する人はいない」
「嫁不足は、個人の問題である」
「人口の多寡と幸福度は、直接関係はない」
「不動産業者の目で自分の土地を見てはならない」
などなど。

満州帰りの農家の持論をはじめ、建て前ではなく実体験に根ざした具体的な議

論は、学生たちの目の鱗をこそぎ落とすに充分でした。

その中で改めて実感したのは「都会からの視線では決してこの世界の現実の全体像は見えない。ましてや、その先の道など見えてくるはずなどない。」という確信でした。

終了後、このような交流を今後も続けようということ、そのためにも毎回農家に分宿するのではなく、気兼ねなく滞在できる拠点のような場所があれば、という声が双方から自然発生的に湧き上がったのでした。今思えば、これが小屋建設の発端だったのでした。

3. 建つまで

次に掲げるのは、51年七月下旬、寮内の全部屋に配られた「君も山小屋づくりに参加しよう!」というピラの文面です。

「我々の大部分は『内地』から北海道の風土と大自然に憧れてこの札幌・北大

にやってきたのだが、この『大都会札幌』、『マンモス大学北大』という状況の中で、どれほどその当初の純粋な欲求が満たされているのだろうか。我々は今、視座の転換の必要性を痛切に感じる。真の北海道の風土を自分の体で実感し、その中で地に足のついた生き方なり学問のあり方なりを模索してゆく……。

我々が今度小屋を建てることになった場所は、北海道本来の風土を色濃く持っている道東十勝の大規模農業で知られる士幌町である。現在話の進んでいる建設予定地は、町の東部(註:西部の誤り)に位置する東ヌプカウシヌプリ山の麓にひろがる新田牧場の一角のミズナラ林に覆われた丘である。付近に人家は一軒もない海拔五百五十メートルの丘だ。ここを訪れた人は誰も『まさにここは北海道だ』と実感するだろう。

一口に『小屋をつくる』といっても実際に建てるのはなかなか難しい。土地、資材、道具、資金、人間などを確保・準備するのは並大抵のことではない。さらにそれ以前に、しっかりとした構想と計

画をたてなければならない。

これまで我々が奔走してきた結果、土地の所有者である土幌農協の内諾を得、さらに土幌在住の恵迪寮OBの絶大な協力によって、資材・道具・運送の提供の見通しをつけることができた。また、土幌在住の北大出身者のつくっている十勝エルム会も援助を惜しまない旨を伝えてくれた。そして我々とこの計画を進めている土幌町役場並びに町立幼稚園長の結城さんの協力によって我々の計画は次第に実現の色を帯びてきたのである。

残るは、我々のプランをさらに煮詰めることと、何人の人間がどれくらいの期間、どれほどの意欲をもって参加するかにかかっている。最初に言い忘れたが、この小屋は僕ら自身の手で釘を打ち、板を切つてつくる「手づくり」の小屋である。設計図ももちろん自分たちでつくる。設計も建設も、そして利用にも、できるだけ多くの寮生が様々な形で関わってほしい。

具体的な利用の形は、大学の支笏寮の

それを思い浮かべてほしい。休暇中や週末に訪れて合宿するもよし、セミナーを開くもよし、山登りをするもよし、天体観測もよし、ただボケつとしているのもいいだろう。利用者は恵迪寮生のほか利用意志のある人間に対してはできるだけオープンなものになりたい。管理は、代議員会にはかつて山小屋管理委員会を設けて行なう予定である。したがってこの小屋は、寮生有志が建てて寮に譲渡し、寮が管理するということになるだろう。建設予定時期は、できれば八月中旬に着工し、九月、十月に集中的に作業して目処をつけたいが、じつくり腰を据えてしつかりしたものにするつもりである。

ともかく、この計画が寮文化と寮生個々の発展にとって大きな意味を持つであろうことは、おそらく間違いないだろう。寮生の主体的参画を期待する次第である。

なお、我々『土幌小屋設立準備会』のメンバーは、今のところ次の通りだが、これからどんどん入ってもらいたい。(メンバー16名の名前)

今になって眺めると、何も知らないと恐ろしいものだと感じさせさえますが(とりわけ日程や法律や金銭の面で)、ただ、この文章の中に「設立趣意書」の理念の核心部の萌芽がすでにあつたことは見逃せません。



昭和52年1月15日(町役場との交渉の日)

「真の北海道の風土を自分の体で実感し、その中で地に足のついた生き方なり

学問のあり方なりを模索してゆく」という表現は、七ヶ月後に作成された第一次趣意書の「視座を十勝という北海道本来の風土を持つ地に移し、札幌農学校以来の伝統である地に足のついた生き方と学問のあり方を模索する」という表現に昇華していったのです。

それ以前に、使われている言葉そのものが、当時寮内のピラで一般的だった、いわゆるセクトの「仲間うち」の言葉ではなかったのです。

この前代未聞の計画の進行は、少し前まで受験生だった寮生たちにとつて、生まれて初めての経験の連続でした。役所へ行ったことはおろか、法律や建築の基本的な用語さえろくに知らず、設計に費用がかかることすら知らない、言わば突っ込みどころ満載の素人集団が、夜行列車に乗って十勝の町に行き、町役場や建設会社と交渉するのです。

夏目漱石の小説「三四郎」ではありませんが、最初はもう笑うしかないような

躓きの連続でした。右も左も分からない集団が前代未聞の計画に突入するのですから、当然といえば当然でした。しかも相手は「大人」や「社会」です。「学校」では決してできない体験でした。

最初は掘建て小屋という話でした。電柱や枕木の古材を使って自分たちで建てる。町の人々との交流を考えるならば、市街地の近くもありということでした。中には土地をタダで貸してやるから小屋を建てたらどうか、と申し出てくれる奇特な農家もありましたが、資金や将来など諸々のことを考えると、まさに絵に描いた餅のようで現実味はありませんでした。

ところが、その年、51年の六月中旬、結城先生から「小屋を建てる土地が見つかった」という連絡があったのです。にわかには視界が開けてきた感がありました。さっそく打合せをして、下旬に寮生4名で町側との話し合いと現地見のため士幌に向かいました。

話し合いでは、小屋についての寮生側

の基本的な考え（必要最低限の質素な建物とし、大工仕事も最大限寮生が参加する。足りない費用は寄付を募る、など）について合意し、町長も最大限協力しようと言ってくれました。士幌高原の予定地域も結城先生と見に行きました。町は「第二次町づくり計画」の一環として小屋を位置付けたい、ということでした。

この会談は、その後のことを考えると大きな意味がありました。つまり、「有志」の「私」的な計画だった小屋が「公」の色を帯びてきたのです。

寮に帰ってきてから、基本的にどんな小屋にしたいのか、町と結城先生の構想についてどう考えるのか、もう一度原点に戻って考えようと、連夜、侃侃諤諤、喧々囂々の議論が続きました。その中で見えてきたのは、寮生たちがそれぞれ頭の中で描いている小屋のイメージがまったく違うということでした。

地元の人たちとの交流を考えるなら

ば、バラックでもいいから町の中に置くべきだ、という意見。自然観察やアウトドア活動も考えるならば、周辺部の自然豊かな場所にする方がよい、という意見。さらには、どちらにしても自然環境の厳しい場所なのだから、数年で壊れるようなものではなく、将来的に長い期間使えるしつかりした建物が必要だ、などなど。つまり、小屋をどんな目的で使うのか、そこからして考えがまとまらなかったのです。しかしそれこそが、原点に戻るために必要な議論だったのです。

結果から言うと、結果的に大筋は町の計画に沿うことになるけれども、「市街地から離れた場所にある程度長い年数、現地の環境と様々な活動に耐えられる建物を」という方向に収斂していったのです。つまり、「我々自身の手によって造り上げる、我々のための小屋」から、地元の人々との交流や一般市民の利用にまで視野を拡げた「広い目的を持つ、開かれた小屋」への転換でした。

この議論の過程で、小屋の件については結果的に袂を分かつことになった仲間もいました。が、それはそれほど真剣な議論を重ねたという証左でもありません。たしかに私たちは議論が上手ではありませんでしたし、慣れてもいませんでした。反りの合う人間ばかりでもありませんでした。しかし、互いに全否定はしませんでした。どんなに時間がかかろうと、意見の食い違うことがあっても、声の大きさではなく、上下関係でもなく、議論を重ねました。どんなに頼りなからうと、俺について来い、というリーダーシップではなく、「代表」はあくまでも代表。出入り自由の、風通しのいい寄り合い所帯。入寮年度の違いはありますが、互いに敬意は払いつつも、それ以上でも以下でもない人間関係。

余談ですが、実はこれが恵迪寮の誇るべき、隠れた伝統のひとつだと思うのです。政争や大学紛争、そしていわゆる内ゲバの吹き荒れた時代の教訓でもありませんし、なによりも大部屋で四六時中、共

に過ごさなければならぬ寮生活の知恵でもありました。

この間、15名の寮生からなる「土幌小屋設立準備会」が結成され、ひとり一万円ずつの出資金を基に、ゆくゆくは趣意書作成などの活動をすることになりました。翌七月と八月に、6名、2名、9名と、候補地の下見や打合せのために寮生たちが土幌町に足を運びました。

町では、まだ具体的な段階ではありませんでしたが、町づくり計画の一環として土地を農協から借入れられる可能性や町と大学との関係や顧問についてなど、様々な角度から話し合いが持たれました。

さて、最初から波乱含みの小屋の計画でしたが、世間一般の常識から考えても、突っ込みどころ満載でした。

「学生の身分より優先してするようなところか」

「別荘ならべつに無くてもいいだろう」

「うまくいかなかったら、誰が責任を取るのだ」

「寄付をもらうことの重さを知っているのか」

「世代交代の短い寮で、引き継ぎはどうするのだ」

「もし建ったとしても、将来的にはどうするのか」

「もし小屋が火事になったら、どうするのか」

「もつと身近な新寮問題などからまず解決すべきではないのか」

「どれも至極もつともな意見でした。仲間との議論の中で出てきた意見でもありませんし、後に学内の教官室の寄付回りの際

に実際に先生方から寄せられた声でもあります。

また、町や町民側から見ても諸手を挙げて賛成できない事情がありました。

「ただでさえ学生運動の盛んな寮なのだから、万一、小屋を作った後で過激派の

アジトとなったらどうするのか」（連合

赤軍の「浅間山荘事件」は、この時まだ4年前のことです、その凄惨さの衝撃は

人々の記憶に新しくつたのです。）

「都会から来た学生たちに町の若い女の子たちが取られてしまつて、花嫁不足に

拍車がかかるのではないか」

「町の悲願である建設中の然別道路が自然破壊ということでは反対されて、工事に

支障をきたすのではないか」

などなど、結構切実な問題だつたそうです。もつとも、これらは後になつてから

聞かされたことですが。

種子が土壤に蒔かれた時は心踊りました。それなりの必然性もありました。ところが客観的には、どう見ても八方塞がりだつたのです。マイナス要因の方が多

かつたのです。心配すればキリがなかつたのです。

こんな時、多くの場合、無事に発芽することはむしろ稀だと思えます。それな

りになぜ発芽して、あまつさえ成長まで

したのでしょうか。今振り返ってみると、

その方が不思議です。その答えは、穴埋め問題の解答のように単語で当て嵌めて

してしまふより、様々な事実を語らせる方が真実に近いでしょう。

話は戻りますが、その時期、つまり51

年の初夏には、もはや「寮の有志」という立場では町との対応ができないことが

明らかになつてきました。

この頃から町民企画課の浪内一洋課長を窓口にして、町との本格的な交渉が始まりました。

氏は後に助役を務めた方で、また、それ以前の町立国保病院の事務長時代には、当時十勝で最も充実した病院のひとつに育て上げた実績を持っています。（帯

広の救急車はいざとなると土幌へ向かう、という報道特集をテレビで見たことが

あります）

その偏見の無さ、度量の大きさ、繊細

さ

さと意志の強さは、十勝の自治体の自治精神を体現したような方でした。当時まだ40代そこそこでしたが、夜行鈍行「からまつ」と土幌線を乗り継いで早朝にたどり着いた弊衣蓬髪の寮生たちを軽んじもせず、いつも大きな体に笑顔の丸顔で迎えてくれ、励ましてくれました。それほどばかりか、清潔とはとても言えない寮生たちをご家庭に招いてくださり、家族ぐるみで歓待してくれました。今振り返れば、どのような学生なのか、信用するに足る学生なのかどうかを見られていたのでしょうか。

そして町内在住の北大・恵迪OBを紹介してくれました。その代表格が、北斗産業の飯尾賢二専務（「恵迪寮史」の昭和13年の頁に寮生としてお名前前の記載があります）でした。大阪の出身で、工学部で研究生生活の後、馬鈴薯から澱粉を精製する最先端のプラントを土幌で立ち上げるという大事業に貢献された方でした。その決断力の早さと懐の深さ、そして見ず知らずの寮生を我が子のように

遇する姿は、会うたびに寮生たちを感動させ、小屋建設への思いを新たにさせてくれました。

もう一方、土幌高校の神戸昇校長（昭和15年農学部卒、のちに土幌町立幼稚園長）も町側の管理運営委員を務めてくださるなど、要所要所で立ち会ってくださり、温かい助言をいただきました。

ただ、拡散しがちな「開識社」や普段は何もできない「設立準備会」の活動に、もどかしさや焦りがあつたのも事実です。仲間のほとんどは他の活動や委員も兼ねていたからです。

「土幌小屋ーやっぱり誰かが死ぬ気でやらないと建たない。

OBの有難さよ、OBは実に遅しく生きているぞ！」（昭和51年8月4日 一寮生の日記より）

昭和51年九月17日深更。クラーク先生の肖像画が見下ろす寮の大食堂。60の部

屋代表からなる代議員会で「土幌小屋設立委員会の設置について」というガリ版刷りの議案書が配布されました。



代議員会風景

議案書「土幌山小屋設立の件」

提案者 六部屋代議員連名

昨年の寮祭がきっかけで、道東十勝の土幌町に寮の山小屋（合宿所）を自力で建てようという計画が起り、これまで

山小屋設立準備委員会のメンバーが中心となつて町役場などと交渉を行なつてきた。その結果、土地を借りる見通しと、資材・道具・運搬の援助の見通しがつき、残るは設計と資金集めと実際の建設作業となつた。

そこで、この計画を一部の寮生だけのものではなく、全寮生のものとするために、ここに提示して寮生各位の賛同と主体的参画を望む次第である。

これから具体的に山小屋の建設を進めてゆく上で、対外との公的対応と寮内活動の安定化を図る必要から、寮内に特別委員会として「土幌小屋設立委員会」を設置することを議案として発起人一同ここに提案する。

なお、この建設計画に費す費用は、寮の会計とは別扱いの独立会計にすることと、小屋の運営に関しては、建設が終了した段階で代議員会にはかることを確認しておきたい。なお、設立準備会の進めてきた建設計画は、次の通りである。

建設場所 … 河東郡土幌町新田牧場

土地提供者… 土幌町
敷地面積 … 約1ヘクタール

収容人員 … 約30人程度

使用目的 … 恵迪寮生・OB・教官・その他、使用意志のある者の合宿、研修、宿泊

建設時期 … 来年春

建設費用 … 規模と設計によるが、数百万円を予想

資金調達方法… 寮生有志の出資金と十勝・道内OBのカンパ

発起人 … 20名の寮生の氏名と部屋名

この議案は、説明と質問の後、満場一致で可決されました。三人の学生が土幌駅に降り立つてからちようど一年余り後のことでした。当時代議員会は新寮問題や学費値上げ問題、食堂の炊夫さんの待遇改善問題などの懸案をめぐって朝まで延々と議論がもつれるのが常態でしたから、この結果は実に異例なことでした。

ともあれ、やっとここまでたどり着いたという安堵より、これでもう後戻りは

できないという覚悟の方が重く感じられた瞬間でした。なぜなら、教養部の寮である恵迪寮にいられるのは二学年までで、当初から関わったメンバーの多くは学部移行の時期を迎え、寮から出なければならぬからでした。つまり、常に世代交代を意識しながら活動しなければならぬのでした。誰かが人柱になつて建つまで留年するという選択肢もありましたが、むしろそれは私たちの意図しないことでした。つまり、「誰かが建てた小屋」ではなく、「バトンを渡しながら、チームワークの結果として建つた小屋」でなくてはならないのです。寮が建てる小屋である以上、そうでなくては意味がないのですから。

委員会設置は町に報告され、これからは有志ではなく、寮内の公的機関の代表として、町や建設会社と交渉していくことになりました。

また、資金調達のためにも、我々自身の抛り所としても、説得力のある趣意書

が必要でした。そのためにも、しつかりとした構想が必要でした。

土地の貸借関係、小屋の概要（構造・建坪・床面積・設備・宿泊人数・予算・工期）・資金調達方法・管理運営（規則・顧問・後援会・二元的管理の方法・管理基金・利用料の徴収）・将来への配慮（万一、寮の廃寮及び小屋が使用不可能の事態に至った場合）などについてどうするか、寮内で、そして町とも協議して、具体的に詰めなくてはなりませんでした。

本分の学業の試験やレポート提出、アルバイト等の合間を縫って、分科会ごとに議論が重ねられ、趣意書や設計図の原案は何度も書き替えられ、設計図も飯尾さんから紹介された北大OBの帯広の小野東機男設計事務所が、なんと無料で引いてくれることになりました。また年末には代表4名が訪町して、助役・部長と用地視察、具体的な詰めが行われました。また、土地について農協と役場の話し合

いが進みました。

「建坪26坪。床面積20坪。木造二階建。屋根はマンサード構造。収容人員20名。設計事務所の概算では予算四百五十八万円。完成予定、昭和52年秋（場合によっては、計画繰り延べもあり）。借地面積一ヘクタール。20年間の予定で町が農協から無償で貸借。建設作業は寮生も参加するが、不足する予算はOBや教官に寄付を募る。」

農協が動きました。期待していたとはいえ、信じられない思いでした。しかし、予算額を聞いて、これは壮大な計画になつてきた、本当に集められるのか、と気の遠くなる思いでした。（社会人になってマイホームを建てる段になるとこんな金額では到底済まないのですが、貧乏学生にとつてはまさに天文学的数字に思えたのでした）

そんな折、浪内さんから「結城先生が東京へ帰られた」と聞き、驚きました。

いわばこの計画の生みの親ともいうべき存在の離脱は、小屋の計画自体には影響はないものの、当初からのメンバーには精神的に大きな空白感を感じさせる出来事でした。浪内さんは「先生は、急ぎすぎたんだよ」という表現で伝えてくれましたが、町づくりのプランをはじめとする理想主義的な面が地元には容易に理解されなかつたことと、招いてくれた町長が亡くなつてしまったことが大きかつたのではないかと推察したのでした。（結城先生はその後、山形県の鶴岡高専の教授となつて地域づくりに活躍されました。土幌時代を回顧された貴重な文章が冊子「土幌小屋活動の記録」に載っています）

年が明け、計画はさらに具体化します。

1月15日、訪町すると、設計事務所から正式な3枚組の図面が上がってきていました。屋根はマンサードではなく三角屋根。現地の強風に耐える勁さと経済性を考えるとこれしかない選択とのこと。

予算は四百五十八万円のまま。できるだけ予算を抑えるために、部屋はシンプルに一つ。二階まで吹き抜け。風呂は防火上設置しない。暖房は、保守や安全のことを考えると灯油ストーブ。水道やトイレには凍結防止のための止水栓をつける。

ともあれ、これらの概要をもとに議論を重ね、手作りの学内向け趣意書（第一次趣意書）が作られました。52年2月のことです。

設立趣意の理念は、前述した通り、七ヶ月前のピラをさらに敷衍したものでした。

【使用目的】

合宿、自然観察、登山、地元の人々との交流、その他趣旨に沿う活動

【利用対象者】

趣旨に賛同する寮生、OB、地元の人々、その他有志

【工期】

52年夏（ただし、資金が大幅に不足した場合は、計画繰り延べもありうる）」

【資金調達方法】

寮生有志の出資（アルバイト）」と寮内外からの寄付

【管理運営】

1、管理運営規則の設定

（今後町と協議して設定）

2、寮内に管理運営委員会を設置する

3、顧問・山元周行先生と美土路達夫先生に決定

4、士幌小屋後援会の設置

（寄付者・委員OBで構成）

5、町側からの管理

（受付・鍵の保管など）

6、管理基金の設定

7、利用者からの小屋維持費の徴収

特筆すべきは、その次の「将来への配慮」という項目です。

「将来、万一恵迪寮の廃寮、及び小屋が

使用不可能の事態に至った場合は、速やかに町と協議の上、以後の運営について決定する」

当時、新寮問題は大学側との交渉の中で膠着状態に陥り、予断を許さない状況が続いていました。寮自治を根絶やしにしたい大学側にとっては、新寮建設と引き換えに、完全個室化や食堂廃止、負担区分、自主入詮権剥奪など、いわゆるアパート化するための願ってもない好機だったのです。全国の国立大学の寮の中でも自治寮の雄であった恵迪寮は、いわば恰好の標的でした。想定などしたくはないけれど、「廃寮」という事態を視野に入れなくてはならないほど厳しい状況だったのです。

ともあれ、いよいよこの趣意書を持って、教官や寮のOBに資金カンパと助言を求める活動を始めました。

そんなとき、突如寮生たちの前に大きく立ちほだかった壁は、ほかでもない大

学当局でした。

挨拶のつもりで趣意書を携えて訪れた学生部で、比喩的に言えば「問答無用で、ばつさり、背中から斬られた」のです。今となつては自分たちがいかに楽天的だったかという笑い話ですが、それこそ晴天の霹靂でした。

曰く、「法律的に言えば、土幌小屋設立委員会というものは、いわば寮内の申し合わせ団体（口約束だけの団体）で根拠はないのだから、大学としては当然公的には認められない。従つて、そこがすることに大学は一切関与しないし、協力もしない。大学の名も寮の名も使つてはならない。ましてや、寄付行為や財産を持つことなどありえない」と。

何も反論できませんでした。法律的には、たしかにその通りでしょうから。寮に帰つても、この世の終わりのような沈黙が続いたのです。一方的に通告された内容如何よりも、なすすべもなく反論で

きなかつたことの対する腑甲斐なきに。しかし、果たしてこれは口を挟まれるべきことなのか？相手はてんから自分たちの「自治」を認めていないのではないか？これでは、田舎の頑迷な親父にどやしつけられているのと同じではないか？

結局私たちは大学の名にはこだわらないかわり、恵迪寮の名だけは旗幟鮮明に掲げて活動を続行することに決めました。

後でわかつたことですが、ちょうどその頃、学当局は道内に保有管理する研修施設（例えば支笏寮）や山小屋を廃止統合して、洞爺湖近くの大滝村（現伊達市大滝区）優徳に収容規模百名、グラント、温泉付きの「北海道地区国立大学セミナーハウス」を建てようと計画を進めているところだったので。

ただでさえ新寮闘争と学園紛争で長年揉めに揉めてきた当の相手が、撰りも撰つて生意気にも研修施設を造るので

知つていてくれというのですから、心中穏やかでなかつたのは、むしろ当然かもしれませぬ。予算規模ではおそらく何十分の一、いや、もしかしたら何百分の一にしか過ぎない計画。しかも理論武装も何もしていない寮生に対することくらい、全国の大学を回ってきた百戦錬磨の専門官にとつて赤子の手をひねるようなことだつたでしょう。

しかし、私たちには「自治」という理念を共有している存在がありました。それが筋金入りの「自治体」である土幌町でした。そして、早くから自立精神に目覚め、当時すでに「日本一の農協」と呼ばれていた土幌農協でした。おそらく学生部は、町から小屋の計画の概要を事前に説明され、協力を要請されていたのでしよう。町としても当然、大学のお墨付きが欲しかつたでしょうから。そうでなくても、後援くらいは。そうでなくても黙認くらいは。しかし、それゆえ大学から足許を見られていたとも言えるでしょう。（その証拠に、「君らは町に利用され

てるんだよ」という驚くような発言が課長からあつたと記憶しています)

しかしもう一つ、私たちには天恵のごとき先輩の存在がありました。

一人は、浪内課長の紹介でお目にかかつていた永澤悟十勝支庁長(後に北海道副知事)です。いただいていた名刺を課長補佐氏に見せた途端、鳩が豆を食らったような表情に変わり、言葉遣いまで改めたのを私たちは見逃しませんでした。私たちには役人同士の上下関係は皆目見当がつきませんでした。この時だけはさすがに鼻白みしました。

目の前に二つの「公」がありました。かたやハナから敵視して居丈高に寮生たちを拒絶し、かたやともかくも愚直な寮生たちを信頼してくれていました。かたや失敗を恐れる上意下達の官吏で、かたや自立していて失敗を恐れない公僕でした。

いや、そんな一面的な話ではなく、「公」

の次元の問題でもなく、そうではなくて結局、「人間」の問題だったのです。今は、それが解ります。

蛇足の愚を敢えて冒すならば、現在の寮生に至るまで、チセ・フレップは、関わった人間に、学校では教えてくれない知恵と信頼というものの重さを骨身にしみるまで仕込んでくれる偉大な教師であり続けていると言えます。知識ではなく、知恵を。契約ではなく、信頼を。

ここで忘れてならないのは、土幌や帯広、そして全道全国の北大OB、恵迪OB、そして教官の存在です。それなくしてチセ・フレップは建たなかったと明言できません。資金や物品の寄付だけでなく、温かい励ましや貴重な助言をいただいたことが、ともすれば俯きがちになつていた寮生たちの小屋建設へのモチベーションをどれほど掻き立ててくれたことか。

町内で酪農や農業を営んでいる北大OBたち。帯広エルム会の人々。そして、

全国の大学OBと寮OB。名簿を頼りに趣意書と振込み用紙を送ってくる見も知らぬ寮生たちに、寄付金だけでなく心に響く励ましの言葉を書いてくださった先輩たち。後輩というだけで、なぜこれほど親切にしてくださるのか、不思議なほどでした。

そして寮生自身による出資、カンパ。言い出しつぺの寮生は、ひとり10万円。そうでなくても数万円。立派な奉加帳を作り、最初が肝心と、名と金額を書き連ねました。もちろんそんな蓄えなどありませんから、突貫アルバイトで捻出する者、下げたくない頭を下げて親から出世払いで借りる者、ともかく資金調達に目処をつけなければなりませんでした。

設立委員はさらに辛酸を舐めます。(ここからは、記録を基に後輩たちの体験を不十分ながら再現します)

五月初めに行われた学生部長の菅原照雄工学部教授との会談で、駄目押しを突

きつけられたのです。

曰く、

一切、恵迪寮の名を使つてはならない
一切、公認しない。助言のみ行う

「恵迪寮」を全て「恵迪寮生」と直すこ
と

母体を明確にすること

すべて文章でとり決めること

寄付について管理を明確にすること

資金不足の場合、着工しないこと

すべて法的に解決すること

一年遅れる覚悟で基礎づくりすること

屈辱でした。子供扱いでした。そして、寮に帰つてからの苦渋に満ちた話し合い。しかしその中で、今までもさんざん話し合つてきたつもりでしたが、批判に耐えられるだけ詰めきれていなかったことが見えてきたのです。我々自身「地に足がついて」いかなかったことに気づいたのです。大学当局との関係はともかく、この趣意書のままでは外部から寄付をいただけないということに気づいたのです。具体的には、

「大学との関係が明確に示されていない」
「土地の貸借関係についてもまだ確定していない」

「将来の管理運営についても十分述べられていない」

「資金調達方法について明確でない」

そして、確実に小屋を建てるための結論を出しました。

「着工の一年延期」です。

今度はそれを前提に町との討議を重ね、設立後は小屋の所有権を町に譲渡するということと、学生主体の運営を行うということの基本線を確立しました。一年間の猶予が、どっしり構えるしかない、という覚悟を生んだのです。

さつそく趣意書の作り直しにとりかかりました。

まず「設立趣意」の末尾には、「尚、当委員会は寮生間の自主的団体であり、

大学当局とは公的な関係はありません。」という一文が付け加えられました。

表紙に記される主体は「恵迪寮 土幌小屋設立委員会」から「土幌小屋設立委員会」に、連絡先も「恵迪寮内土幌小屋設立委員会」に書き換えられました。

「工期」の項目は「53年夏」と書き換えられ、「但し資金が大幅に不足した場合、計画繰り延べもありうる」と括弧書きされていたものが、「計画縮小もありうる」に変わりました。「背水の陣」です。

そして「管理運営」の項目に次の文が付け加えられました。

「事務局は恵迪寮内におく」
「建物完成後、当委員会はその所有権を町に譲渡することを決定している。これは山火事その他不慮の事故が発生した場合の実質的責任を考慮し、町と協議したものである。」

短い文章ですが、管理運営の主体を確保しつつ、母体である寮の行く末まで含めて視野に入れながら法律的にも後顧の憂いを残さないために重ねた議論と交渉の結果でした。

昭和52年9月、第二次趣意書が完成。しかし、実はこれでも、小屋建設という山のやつと五合目に到達したくらいでした。これからあとは、レンガの壁を根気よく積み上げていくような地味な力仕事でした。

11月、ついに学長と学生部長から奉加帳への署名と寄付を取り付けます。個人的とは言いながら、実質的には寮生側が土俵際で寄り切ったも同然でした。そして、学内の寄付回りとOBへの趣意書発送が再開されました。最終的に発送した総数は、二千四百二十五通にのぼりました。

学業やアルバイトの傍ら、部会ごとに分かれての連日の徹夜の議論による計画

の作成や練り直し。町や農協との契約と協定とその準備、管理運営についての細則づくり。夜行列車やヒッチハイクによる現地行、寮生や教官対象の募金やOBへ発送する趣意書と振込用紙を入れる封書の宛名書き。

特に「学内回り」と呼んでいた、二人一組で趣意書や奉加帳などの「七ツ道具」を持つて教官室を訪れて寄付をいただく活動は、緊張の連続でした。相手はなにせ、一筋縄ではいかない先生方です。ところが多くの場合、普段なら決して見ることのできない素顔を見せてくださり、この「変な寮生たち」の話をまともに聞いてくれたのです。アドバイスマでしてくれた先生もいたといいます。

「喜んだり、落ち込んだり、悩んだり、学んだりしながら教官回りは地道に続けられた。12月5日の会議ノートには、『本日教官にボーンナスが出たので、明日大攻勢にでる』などと、大いに我々らしい記録も見られる。」(大堀 尚己君「小屋設

立の現実化に向けて」)「土幌小屋活動の記録」より)

昭和53年1月27日、大学当局と土幌町、そして寮生(設立委員会)による三者会談が行われ、結果的にはこれまでの各々の立場を確認し、これからも各々が各々の立場で進むことしかないと確認します。

「地に足のついた」とは、たしかに様々な困難や試練にさらされながら、それらをひとつひとつ乗り越えてゆく過程でもありました。それぞれの過程とエピソードを記せば、本が何冊も書けるほどの力仕事の持久戦でした。

その後、しかし、さらに追い討ちがかかります。設計から二年が経過し、折柄の全国的な建築資材の価格高騰により、予定していた建設費用が、四百五十八万円から六百五十万円へ膨らんだのです。

「OB宛に発送した趣意書も、もう返

信が絶えていた。しかしまだ寄付してくれていない人はかなり多い。ここで私たちはそういう人から三千人を選んで、なんとハガキで督促状を出すというをやつてのけた。思えばずいぶん失礼なことをしたものである。受け取つた方もさぞかし驚いただろうが、それでまた寄付をしてくれた人もいたのだから、OBもかなり寛大なものだと感じてしまう。ともあれ前代未聞の寄付集めではあった。

学内回りについては、6月16日に再びポナス狩り大作戦が行なわれた。(大堀尚己君「土幌小屋活動の記録」より)



建設予定地下見風景

「振込用紙の通信欄に書かれた先輩からのメッセージは私達にとって大きなはげみだった。そしてまた、先輩たちがどれほど恵迪寮を愛し、在寮の思い出を大切にしているか、ということを知って深く感動した。」(同君・同書より)

【先輩からのメッセージ】

「設立趣意書を拝見しました。地元十勝に住んでいる人間として非常な共鳴を覚えました」(帯広市在住)

「美しい大自然の中に立派な山小屋を建て、『琥珀の酒を汲み交し、王者の誇惚ぶ』

よすがともなれかしと祈る」(東京都)

「往昔を想い、寮生活を懐かしんでいます。寮の発展と寮生諸君のご活躍を祈ります」(岐阜県)

ます」(岐阜県)

「貧者の一灯まで、送金いたします」(大阪府)

「小額で申し訳ないが寄付いたします。小生には仲々そちらへ行かせてもらいう折

がありませんが、ガンバってください」(京都府)

「有効にお使い下さい。子供ともども山小屋の完成を楽しみにしております」(函館市)

「恵迪寮、開識社、なつかしい若い時を思い出す。帯広に十三年勤めていたので、土幌の地もなつかしい。貴君らの働きの上に神の祝福を祈る。多数の賛同者を得て、是非予定通りのものが出来ることを望みたい。」(静岡県)

(同君・同書より)



土幌小屋の建設を報じる新聞記事

そしてさらに、捨てる神あれば拾う神あり、寮生の工事労賃を建設費と相殺してくれるなど、採算を度外視して受注してくれた北斗産業の決断と町と道からの補助金支出の決定。終わってみれば、首

の皮一枚で費用に目処がついたのです。

起工式の前日、町は夏祭り。近隣の町村からも参加チームが集まる土幌名物「仮装盆踊り大会」でした。急遽参加の決まった寮生チーム23名は、スコップやツルハシを手に即興の「建設音頭」を踊りまくり、観衆からヤンヤヤンヤの大喝采を浴びて、なんと特別賞までいただいたのでした。「山小屋の北大生」が土幌町民に認知された瞬間でした。



協定書を手交する後藤町長と大堀委員長。後列左から飯尾北斗産業専務、山元先生、神戸先生。(昭和53年8月20日、土幌町役場)

ついに昭和53年8月20日、役場の会議室で「山小屋に関する協定書」が、町と寮関係者の立会いのもと、後藤町長と大堀委員長の間で署名、調印、手交されました。顧問の山元先生、地元の神戸さん、飯尾さんも立会人として署名しました。

そして翌日、現地での起工式。ミズナラの樹に芹沢元委員長が鉦を入れ、一斉に「都ぞ弥生」の大合唱。霧に包まれた山麓と森林に木霊する爆竹の轟音、朗々と響く寮歌。20キロの牛肉と飲み放題の牛乳、山盛りの茹で馬鈴薯。立ち昇る湯気と煙。

「霧の中でチセ・フレップの起工式は厳かに行われた。残念ながらヌプカウシ・ヌプリは顔を出してくれなかったが、多くの町の人、寮生たちとともに我々は新たな一歩を踏み出した。

今、夜の九時二十分。たくさんの人が祝ってくれる。稚拙な起工式だったし、礼を失することも多かつたと思う。にも

かわらず、我々を温かく見守ってくれる。その期待の大きさに、肩の荷重し。我々の計画は我々のみにしてならず、幾多の人々の協力と、絡みの中から生まれたのだ。「学生の甘え」と言われぬように。そして「嘘つき」と言われぬように。(「建設日誌」より T・O君)



起工式「都ぞ弥生」斉唱

「札幌を発ち、九時間のものち、この地土幌に到着。駅は北海道なら簡単に見つ

けられるような、小ぢんまりとした田舎普請。町並もこれという独特なものは見当たらない。しかし、役場から土幌高原に向かう途中に、思わずはっとした。小径に引き裂かれた両側から果てしなく続く大地のうねり、小屋ーチセ・フレップ建設予定地は、このうねりの頂きにあった。

起工式は粗末なものながらも、感動的であった。私は、言つて見れば部外者であり、寮にいろいろと仕事を残して此処に来たのも、半分は寮長たる面目を立てるためである。敢えて、この小屋設立に何をしたかと言えば、小屋の柱にして五センチ位を寄進したに過ぎない。

この小屋設立事業の達成は、それが寮生の自己満足というだけでなく、自然を愛し、自然と人間の正しい在り方、関係を学ぼうとするすべての人々に開かれた場を創り出そうとしたこと、そして、そのアンビシャスな試みが多くの人々の理解、協力、信頼関係を通じて実現に至つ

たこと、その点で恵迪寮文化活動として至高のものである。いや、日本の何処の寮でも未だ成し遂げたことのない立派な偉業であると確信する」(「建設日誌」より 第二二三期執行委員長 久野寛之君)

ミズナラ林の端にテントを張つて、翌日から「土方ツアー」と呼ばれた、寮生の労働奉仕による建設作業に突入したのです。

「パワーショベルの力に驚きつつ、穴を掘り、材木を運び、釘を打つ。仕事の間には山に登り、夜はテントで酒を酌み交わす。」「(土幌小屋活動の記録」より)

「棟上げがこんなに早くできるとは思わなかつた。二階の天井の梁の上にアユミ板を並べて脚立を立てると、さすがに高い。周りの樹の梢が目に見えるのだ。(中略) 午後には屋根垂木をつけて、あつという間に三角屋根の形ができあがつた。実に美しい。一番上の棟木が光つて

いる。感激、感激！」(「建設日誌」より N・O君)

「最近の学生はダメになったと世間では思われているが、そうではないということ、小屋を中心とする面々は一つの例をもって示した。このバイタリティーは大いに評価されていると思う。ただ、この計画は一般北大生と遊離したところで進められているように思う。欲を言えば彼等の参加も望みたい。」(「建設日誌」より T・T君)

【小屋建設に関わる収入】

北大OB・寮OBからの寄付

二百四十八万二千五百八十円

北大教官からの寄付

六十万九千円

一般の方々からの寄付

二万二千元

寮生及び北大生からの寄付

百四十万六千九百四十四円

北大OBから寄付された本

六千円

「ある予科生の悩み」の売上

六千円

寮OBから寄付された

「全国寮歌集」の売上 六万二千元
建設工事アルバイト代 二十五万円
土幌町からの助成金 二百万円
北海道からの助成金 八十万円
計 七百六十四万七千六百七十四円

【支出】

建設費および付帯設備

備品（什器・工具等） 六百二十五万円

十一万七千円

趣意書印刷費

五万円

趣意書発送費

三十七万円

その他

六万六千二百一円

計 六百八十五万三千二百一円

なお、残金七十八万円余は、照明設備・テーブル・椅子・備品および環境整備のための支出に充てられました。（昭和54年2月23日発行「土幌小屋チセ・フレップ」設立報告書より抜粋）

4. 建ってから

ついに、昭和53年10月23日、約二ヶ月間の工事の後に、土幌高原の牧場脇のミズナラ林の中に「チセ・フレップ」の赤い三角屋根が姿を現しました。

さて建物は建ったが、それから何をやるのか？

最初からレールが敷かれていたのではなく、小屋を利用してゆく中で、代々の学生たちが試行錯誤を重ねながら、町とも話し合いながら、時間をかけてその答えを出してきたのです。

通常の利用以外の大きなものでは、当初からの学生の農業実習や「自由大学」のベースキャンプ、夏祭りなどの町の行事への参加、三年目から町教委と連携した地元の小学生たちとの林間学校（一時中断はありましたが、その後復活して現在も継続中です）、そして平成26年から、地元の小・中学生の休み中の学習を寮生たちがケアする「子ども学習サポート塾」やALTとともに子どもたちと英語に親

しむ「イングリッシュキャンプ」（どちらも町教委主催）への参加と、町の教育活動へのボランティア参加も板についてきました。

殊に林間学校は、毎回学生たちの方が子どもたちのパワーに圧倒されるほどで、学生にとっても大学では学べない貴重な体験です。かつて参加した小学生たちが今や親となって強力な支援者となってくれているといえます。一回りしたのです。なんとも心強く、喜ばしいことではありませんか。

これらの活動についても、本が何冊も書けるほどの出来事とエピソードに満ちた歴史があります。今回は外観をなぞるだけにとどめて、近い将来、直接関わった人間が語り部となって後輩たちに伝えてくれることを期待します。

改めて感じるのは、チセ・フレップが様々な世代の人々の、言わば垂直の広がり、地理的な、言わば水平の広がり

結ぶ結節点の役割を果たしているということ。この小屋がなかったら決して出会わなかったであろう人々の数と多様さを想像すると、なにか胸が熱くなるほどです。



土幌町の子どもたちとの林間学校のひとコマ（土幌小屋チセ・フレップのブログより）

小屋の保守や修繕、改善についてはそ

の時々々の運営委員会が町と協議しながら小まめにおこなっています。屋根の修理や塗料の塗り直し、物置の設置、トイレの改修、畳や寝具の更新などから床のワックスがけ、窓ガラス磨き、照明器具の交換、ストーブの柵の設置、備品の整頓、時にはボランティアも交えて常に入れているので、小屋は未だに現役感を保ち続けています。最近では寮生手作りのウッドデッキが設置されたのがトピックです。



小屋整備に取り組む寮生たち（土幌小屋チセ・フレップのブログより）

小屋の建物は寮生（設立委員会）が町に譲渡（寄付）し、土地は農協が無償で貸してくれています。当初想定していた期限は20年間でしたが、今や40年が経とうとしています。

この度重なる期限延長は、建物が頑丈で長持ちしたからという理由だけではなく、これまで代々の現役寮生たちが町と農協との信頼関係を基に手を携えて長年共同運営と手入れをしてきたこと、町民の方々が温かく見守ってくださっていること、そして他に類例を見ない学生による社会参加の形が実を結んだことの証しであると信じています。

5. 結語

はつきり言えることがあります。

土幌小屋チセ・フレップは、恵迪寮が自治寮でなかったら、間違いなく建っていません。個室アパートであったら、建っ

ていません。その意味で、自治精神の申し子です。想起すべきは、チセ・フレップ設立のそもその機縁となったのが、自治の象徴である寮祭だったということです。

同時に、相手が土幌町と土幌農協でなかったら、間違いなく建っていません。その意味でも、自治精神の申し子です。町と農協が自らの判断で、寮生を信じてくれたのです。それだけの来歴と自負を町と農協が持っていたからできたことです。

しかし、関わったひとりひとりの思いがなくても、間違いなく建っていません。個人的には、なんの得にもならないことです。むしろ苦労ばかりです。いや、建つてからの方がもっと苦労に満ちていると言えるかもしれません。それにもかかわらず、一度として委員会の鎖は途切れていません。この精神の無償性は、突飛かもしれませんが、札幌農学校を思わせるのです。

小屋をめぐる人の輪は、小屋に関わった寮生の精神のさざ波は、その後さらに大きなうねりとなりました。小屋づくりの寮生の輪の中から十数年ぶりに、セクトからではない一般寮生の寮長が生まれたのです。土幌のミズナラ林で汗をかいた新入寮生が、その後選ばれて寮長となったのです（昭和54年10月 第二百二十七期 小寺収委員会）。小屋が竣工してから一年足らずのことでした。セクトからではない、ごく普通の、しかし自治意識の高い寮生が。

ところが、ご存じのように、恵迪の名さえ消されようとした寮自治の存亡の危機の時代を迎えます。

当時寮生だった人から聞いたことがあります。新寮移行を逆手に取った四条件（完全個室制・負担区分導入・寮食堂の廃止・自主入銚権の剥奪）をはじめとする大学側の入念で執拗な攻撃のために寮自治の存続自体が危機に瀕していた、そ

の防戦一方の長丁場で、鬱屈しがちだった寮生たちの気持ちを支える精神的な柱の一つが土幌小屋の存在だった、と。

土幌小屋運営委員会は、複数人数部屋と部屋サークル制を基礎とする恵迪寮独自の自治の形の中で、特別委員会の部屋として活動していました。それ自体も存亡の危機に瀕したのです。その危機的状況の中で、一時期は寮外へも視野を広げて「自由大学」という学内サークルの展開も経たものの、現在は従前どおり特別委員会の部屋サークルとして旺盛に活動しています。

実際、現在の恵迪寮に足を運べば判ります。寮自治は、実質的に後輩たちによって守り通されたのだと。そして、そのための梃子の一つとして、土幌小屋チセ・フレップは機能したのだと。大袈裟な喩えかもしれませんが、もしかしたら、土幌小屋チセ・フレップが果たした最も想定外の働きは、母胎である寮への恩返しだったのかもしれない。

その意味でも、落とし子ではなくて、申し子だったのです。

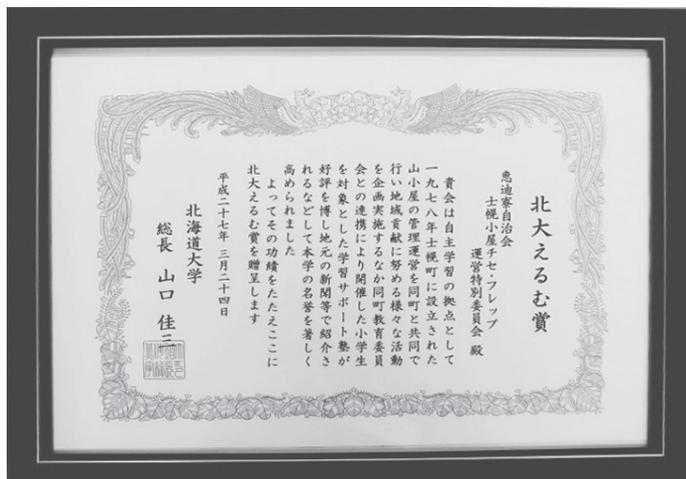
「恵迪寮史第二巻」の「編集後記」に次のような述懐が記されています。

「執筆開始当時の編纂委員が次第に卒業し始めた一九八五年夏、寮舎移転後入寮の新委員を加え、土幌小屋チセ・フレップにおいて合宿を行い集中的に編纂作業をし、それまで断続的かつ細々と行われていた作業とも相俟つて、ようやく本書の刊行を展望し得るようになった。その後、一九八六年春、夏の合宿作業を経て、ようやく刊行を迎えることとなった。」

クラーク博士に淵源する自治精神が恵迪寮の命だとすれば、自治の申し子である土幌小屋チセ・フレップは、寮の自治が生きている限り、これからも存在意義を失わないと思うのです。

平成27年、北大総長名で「北大えるむ賞」が恵迪寮自治会 土幌小屋チセ・フ

レップ運営特別委員会に贈られました。



小屋の内壁に掛けられている賞状

「貴会は自主学習の拠点として一九七八年土幌町に設置された山小屋の管理運営を同町と共同で行い地域貢献に努める様々な活動を企画実施するなか町教育委員会との連携により開催した小学生を対象とした学習サポート塾が好評を博し地元の新聞等で紹介されるなどし

て本学の名誉を著しく高められましたよってその功績をたたえここに北大えるむ賞を贈呈します」

最初どう解釈していいのか、軽い目眩を覚えました。正直、訝しさも感じました。「時代の趨勢」か「和解」か、それとも「パラダイムシフト」なのか。しかしのちに、これが寮生側からの申請の結果だと聞いて腑に落ちました。つまり俯瞰的に表現すると、「恵迪寮という生命体が40年をかけて大学にその自治の成果を『公式に』認めさせた」ことになるのではないのでしょうか。だとすれば、おそるべき現寮生、しつかり我々のDNAを受け継ぎ、軽々と実行しているのです。嬉しいではありませんか。大学側にその認識があるかどうかはさておき、40年前、まさかこんなことになるとは誰も予想していなかったのは明らかです。

ところで、もつと大切なことにまだ言及していませんでした。

チセ・フレップは、今でも私たちに「お

前は、本当に『地に足のついた生き方』
をしているのか？」と問いかけているよ
うに思えるのです。

小屋の建設や運営に関わってきた寮生
たちも、障壁に突き当たるときに自分自
身に対して同じ問いかけをしてきたのだ
と思います。

たしかに、名利や権力を求めて奔走し
ている寮友など見たことがありません。
むしろ国境など軽々と超え、そうでなく
ても地道に「現場」で、しかも「理念」
を持って活動している者たちばかりで
す。しかし、それはまだ表面的かもしれ
ません。答えの出るはずのない問いかも
しれません。しかし、常に問いかけるこ
と自体に意味があると思うのです。少な
くとも問い続けている間は、札幌農学校
と地続きだと思えます。

設立時の顧問を務められた山元周行先
生が、冊子「土幌小屋活動の記録」への
寄稿文「土幌小屋建設のころ」の中で、「理

念を継承し具体化するにあたっての多く
の学生諸君の苦労を見ると、理念を説く
者は、その結末を慮るべきであると思
う。」と述べられているのを読むと、そ
の正鵠を射る射程の長い指摘に思わず身
の竦む思いがします。

おそらく設立に関わった人だけで数十
名、その後の運営に関わった人を含めると
軽く数百名を超えているでしょう。

若かったとはいえ、自由意志だったと
はいえ、そして行く末に思いを致さぬわ
けではなかったとはいえ、その後、後輩
たちの上にもたらした影響や目に見えぬ
労苦、払わざるを得なかった負担の大き
さを考えると、初期から関わった者とし
て、理念を説いた者として、今更ながら
肅然とせざるを得ません。

影響どころか、人生の軌道そのものも
変わってしまった人すら少なくありません。
中には地元土幌町や十勝に就職した
人、土幌の方と結ばれて家庭を持った人、

そうでなくても土幌小屋に出会ったこと
で価値観や世界観が変化した人も少なく
ありません。あたかも、寮が私たちに変
化をもたらしたように。

最後に、ささやかなサプライズとお誘
いです。

現恵迪寮自治会では毎年、五月の連休
に「新歓土幌合宿」と銘打って新入寮生
と共に土幌小屋チセ・フレップに泊まり
込み、牧場での寮歌指導や白雲山登山、
星空寮歌指導や調理や入浴などを通じて
親睦を図っているのだそうです。

今年参加したのは新入寮生53名、現寮
生40名の、なんと計93名。あの小屋にいっ
たい、どうやって泊まったのでしょうか。
しかも二泊も。想像するだけでぞつとし
ますが、伝え聞いたところでは、一階は
男子、二階は女子という、よく考えたら
至極もつともな分別（ぶんべつ）と分別。
小屋の構造も、まるでこの日のために考
えられたような中二階。気持ちいいほど

使いこなしてくれています。

そして、これを読んでいるあなたに。いつかチセ・フレップに足を運んでみませんか。できればひとりで、数日間。

最初は退屈です。夜中は森の鳴る音が不気味です。しかし降るような星や朝夕陽を身に感じ、建設時からの日誌に人間の声を聴いているうちに、奥に隠れていた自分自身の声が聴こえてくるに違いありません。

(文責 鹿田 幸年 昭和50年入寮)

※利用の申込みは、「北海道大学恵迪寮自治会 土幌小屋チセ・フレップ運営特別委員会」TEL. 011-747-17849 (寮務事務室)、もしくは「土幌町役場総務企画課」TEL. 01564-5-5212 (直通)へ。



90名以上が参加した2017年新歓士幌合宿(恵迪寮自治会ブログより)

【参考文献・資料】

- 「恵迪寮史(昭和八年 恵迪寮寮史編纂委員会刊行)復刻版」(昭和50年 恵迪寮寮史編纂委員会刊行)
- 「恵迪寮小史(昭和18年 第二回寮史編纂委員会発行)復刻版」(昭和50年 恵迪寮寮史編纂委員会発行)
- 「恵迪寮史 第二巻」(昭和62年 恵迪寮寮史編纂委員会刊行)
- 「北大恵迪寮 土幌小屋活動の記録」(昭和58年四月 恵迪寮土幌小屋チセ・フレップ運営委員会発行)
- 「土幌小屋チセ・フレップ設立報告書」(昭和54年二月23日 土幌小屋設立委員会)
- 「昭和53年度 土幌山小屋チセ・フレップ設立運営綴」(土幌町役場町民企画課企画係)
- 「土幌小屋設立趣意書」(土幌小屋設立委員会)
- 「ヌプカウシヌプリ 創刊号」(昭和52年10月30日 土幌小屋設立委員会出版部発行)

「君も小屋作りに参加しよう！」（昭和52年七月25日 恵迪寮有志発行）

「土幌小屋建設めざしてカンパのお願い」（昭和52年二月25日 設立委員会）

「土幌小屋建設計画の経緯」（昭和52年二月23日 新旧設立委員会移行のための覚書）

【小屋に関する小年表】

1975・10・20

・結城清吾氏、寮祭記念講演

1976・3・1

・寮生ほか8名、4泊5日で土幌農家での宿泊体験と農業研修センターでの自由大学に参加。小屋設立の契機となる。

1976・6・26

・初めて町と話し合い、候補地下見。以後頻繁に訪町

1976・7・9

・寮生15名で設立準備会を結成。

1976・7・23

・在町寮OB飯尾賢二氏・十勝支庁長永澤悟氏に面会

1976・7・25

・参加を呼びかけるビラを全寮生に配布
1976・9・17

・代議員会で発起人寮生20名により「土幌小屋」設立委員会の設置案を提案。

全会一致で可決。以後、部屋を持つて活動する。

1976・10・17

・寮祭で小屋のジオラマと資料展示・スライド上映

1976・11月

・結城先生離町

1976・12・11

・計画概要を町に提出。管理運営や将来への配慮、資金調達方法や造作・設計について打合せ。

1977・1・15

・設計図完成。建坪26坪、収容人員20人。三角屋根・吹抜け二階建ての原型が固まる。見積もり額458万円余。以後趣意書を基にした資金調達の段階に入る。

1977・2月

・顧問が美土路達雄先生（教育学部社会教育）、ついで山元周行先生（理学部数学）に決定。

・第一次趣意書（手作り・学内向け）完成。
・小屋の所有権を町に譲渡する腹づもりを委員会で確認。

・寮生対象のアンケート結果。

小屋の計画に賛成し建設に参加したい35名、不参加15名（回収50名中）

・初期委員の学部移行による退寮に伴い、設立委員会が新体制へ移行。内田敏博（長）、芹沢利文（副）、山本慎之介（会計）。

1977・2・20

・北海タイムスに「恵迪寮有志のでつかい夢く土幌山麓に小山屋く農学校の原点にバイトで金集めを」の記事。

1977・2・25

・パンフレット「土幌小屋建設めざしてカンパのお願い」を全寮生に配布。

1977・2・26

・第1次趣意書（印刷・学外向け）が完成。奉加帳なども用意して教官室回りやOBへの郵送による募金を開始。

1977・3月

・学生部総務課長と面談。一方的通告。
1977・5・6

・菅原照雄学生部長と会談。一方的通告。

その後、議論の末「着工の1年延期」を決定。

1977・5・16

・第二次趣意書作成開始。委員14名

1977・6・15

・設立後は小屋の所有権を町に譲渡することを正式に町に伝え、学生主体の運営を行うという基本線を確立する。

1977・9月

・第2次趣意書完成。

1977・11・2

・学長・学生部長から寄付と署名を取り付ける。

1977・11・29

・学内への寄付回りとOBへの趣意書発送再開。

1978・1・27

・大学当局、土幌町、寮生の三者会談。

1978・8・20

・町との間で「山小屋に関する協定書」の調印。

1978・8・21

・起工式

1978・10・23

・竣工式

1978・11・23

・設立委員会を土幌小屋『チセ・フレップ』運営委員会に改組。

1979・3・4

・自由大学（寮内）発足。

1979・7月

・農業実習開始。

1980・1・23

・四条件決定

1980・7・25

・白雲山空き缶拾い。

1981・8・5

・第一回林間学校

1982・6月

・「土幌チセ・フレップ設置条例」が町で制定される。

1982・12・17

・学内サークル「自由大学」発足。（一年後、発展解消）

1983・3・31

・女子寮を除くすべての寮が閉鎖される。

1983・4月

・コンクリート新寮スタート

・「土幌小屋活動の記録」チセ・フレップよ永遠に」が発行される。

1987・3・20

・「恵迪寮史第二巻」刊行

1989

・自主入銚闘争取捨、正式に「恵迪寮」となる。

1998・8・8

・20周年記念式典

2008・9・14

・土地契約更新・30周年記念行事（ヌブカの里で記念式典・パークゴルフ大会・祝宴）

2009・4月

・料金徴収を廃止（町規則改定のため）

2010

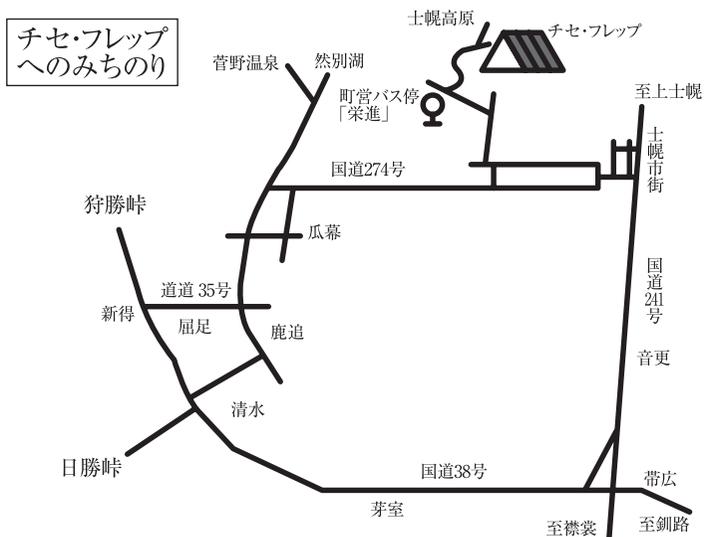
・林間学校の再開のため活動。

2014・3・28

・子ども「学習サポート塾」活動開始。

2015・3月

・同活動に対し大学より「えるむ賞」が与えられる。



柔らかな初秋の日差しに佇むチセ・フレップ